

客体が諸主体の関係の編み目から抜け出す時

柿 本 昭 人

I 問いを愛するということ

今から100年ほど前のこと。ウィーンの陸軍大学に通う学生フランツ・クサーファ・カプスから、自作の詩を送りつけられたリルケは、その学生と文通を始める。そのうちの一通に、こうある。

あなたは本当に若く、あらゆることが始まる以前にいらっしゃる。ですから、私はできるだけあなたにお願いしたいのです。どうか、あなたの心のなかのあらゆる未解決のものに対して忍耐をお持ちになるように、そして問いそのものを閉ざされた部屋のように、まったく未知の言語で書かれた本のように、愛することに努めてください。今は答をお求めにならないでください。あなたに答が今与えられないのは、あなたには、それをまだ生きることができないからです。ところが、何よりも大事なものは、すべてを生きるということなのです。今は、問いそのものを生きてください。そうすれば、あなたは、おそらく気づかないうちに、おもむろに、いつの日にか、遠い将来に、答のうちに生きておいでになるでしょう（Rilke [1929] S. 21）。

現在の大学生は忙しい。入学早々始まるキャリア教育。三年生の秋には、就職活動が始まる。入学まで、随分と長い間、「問いを愛する」とは正反対の生活を続けてきたはずなのだが、彼らは始終こんな質問をする。

——「正解は何ですか？」

——「失敗しない選択は、どうしたらできますか？」

「未解決のもの」は、存在しないのだろうか。そう、そう存在しないのである。自分が持っている電子辞書に、自分が開いたインターネットの検索サイトに登録されていない言葉は、存在しないのと同じように。小アレクサンドロス大王たち——。

その一方で、精巧かつ万全のはずと思われていた制度や装置が、あっけなく機能不全に陥り、崩壊するのを目の当たりにして、樽あるいは土管ならぬ部屋や「自己」に閉じこもる若い人々。

——「先のことは、分からないじゃないですか。」

——「分からないことに頑張るのは、馬鹿らしいじゃないですか。」

無欲を装いながら、「無誤謬」のものを、犬小屋の穴から熱烈に希求する小ディオゲネスたち——。「分からないから面白いんじゃないの」と、その犬小屋の穴から覗き込んで声を掛けようものなら、アレクサンドロスではない者にも、「日向ぼっこの邪魔ですから、どいてください」と。

小アレクサンドロス大王たちと小ディオゲネスたちは、別種の者ではない。両者は、ともに欠けるところのない「全能」なるものの実在を確信しているのである。

蹉跌からの再起を期しながらロダンの『地獄門』を見に行き、再度落ち込んだセバステイアン・メルモスに、ロダンならばこう声を掛けるだろう、とリルケはその『ロダン論』で述べている。

若い時は、ただただ若いばかりでしたよ。若くては、何も分かりません。分かるっていうのは、あとから、ゆっくりとやって来るんですよ (Rilke [1907] S. 90)。

小アレクサンドロス大王たちと小ディオゲネスたちは、リルケのこうしたアドヴァイスにも、即座にこう質問や反論を行うだろう。

——「年をとると、誰でも分かるようになるんですか？」

——「あとから、ゆっくり、と仰いますが、いつですか？」

彼らがこうした質問や反論を行うのは、リルケのアドヴァイスに含まれる

「人」という、英語とドイツ語における man やフランス語における on の次元を信じることができないからである¹⁾。

そうなる時もあれば、そうならない時もある。いつとは言えないけれど、そう信じて生きていくということが、「問いを愛する」ということではないのかな。このように、リルケのアドヴァイスを受け取ることができないということである。

では、「問いを愛する」とは——。

リルケは、先のカプスを、手紙でこうたしなる。

起こることのすべてが、常にまた発端であることがお分かりになりませんか？（…中略…）私たちが憧れ求めるものが、既に存在していたならば、私たちには何の意味もないではありませんか？（Rilke [1929] S. 32）

リルケの言う「問い」にあっては、その答は未だ姿を現さず、未知のままである。ロダンのように、幸運にもその答の姿が段々と見えてくる保証もない。あるのは、問いに対する答があるに違いない、という信頼のみである。

何の根拠もないが、大事に思うこと。そして、その思いが探求という行為と不可分である時、「問い」は「愛されている」ことになるだろう。「問い」には、予め辿るべき道筋が用意されていないのである。

「問いを愛する」——。それは、氷壁を登っていく登山家の姿に似ている。

登山家は、氷の面を読みながら、接平面を探し出し、杭を打ちこんで進んでいく。杭の打ちこまれる位置が、そこでよかったのかどうかは、事後的にしか分からない。杭が抜け落ちなかったとしても、他に打ちこむ場所が、そこしかなかったのかどうかは分からない。おそらく、あったはずだ。

登山家は氷壁を愛する。滑落しても、自分の愛に伝えてくれなかった、と氷壁をなじるわけにもいかない。身も心も捧げて、その愛のために死ぬこともあ

1) リルケのアドヴァイスに含まれる「人」の次元については、次を参照せよ。「それぞれの個人、それぞれの言説が、もはやある反省のエピソードでしかない《人 on》の次元で思想を展開させる術」である（Foucault [1966] p. 548）。

る。Liebestod——。

始まりが、自分ではない誰かによって外在的に定められ、その到達点も、その到達点への道筋も予め定められているものは、「問い」でもなければ、「愛する」でもないだろう。

入試のことを思い出せばよい。入試では、「問いを愛する」とはいかない。そもそも、問題を「愛する」時間もない。あっという間に「はい時間です」となる。衆人環視のもとで愛を綴ることなど、できようはずがない。入試では、問題に対する答は明確な姿をとって既にある。それは問題ではあっても、「問い」ではない。課題なのである。

II TM と NTM

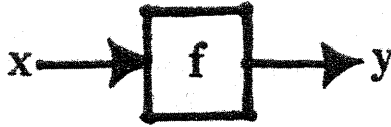
アレクサンドロスの行くところ、世界のすべては正解と不正解、勝者と敗者へと変じられる。一方のディオゲネスは、世界を捨てたと見せかけ、無能を装い、通りかかったアレクサンドロスをやり込めようと手ぐすねを引いて待ち構えている。

アレクサンドロスに陽の光を分け与えよと要求するディオゲネスは、自分もまたその日の光で影を作りうる人間だと実演する。「それは、一つの立場からの見方に過ぎませんよ」というわけである。全体の俯瞰——。だからこそ、アレクサンドロスは、生まれかわったら、哲学者、ディオゲネスのようになりたいと言い始める。

このアレクサンドロスとディオゲネスとの関係を、「思考の形式」という側面から見てみよう。この二つの思考の形式を簡便に対比するには、バイオ・コンピュータ研究の第一人者であったハインツ・フォン・フェルスターの議論が、大いに参考になる²⁾。

2) フェルスターは、かつてイリノイ大学バイオ・コンピュータ研究所所長であった。サイバネティクス、自己組織化、脳研究、情報処理等の研究を行ってきた。サイバネティクスと自己組織化の議論が相容れないと見るのは、早計ということになる。

第1図



出典：Foerster [1984] p. 9.

フェルスターは、「計算 computation」を「[無制限にある] 物事を、一緒にして com 考える putare」と積義したうえで、計算の実行体として「機械」を取りあげる。その機械には、二種類あると言う。「トリヴィアルな有限状機械 Trivial Finite State Machine (以下 TM)」と「トリヴィアルではない有限状機械 Non-Trivial Finite State Machine (以下 NTM)」である (Foerster [1984] pp. 8-9)。

TM を図示したものが【第1図】である (x, y, f はそれぞれ機械の入力, 出力, 機能を示し, 矢印は演算の行われる方向を示す)。この機械の動きは, ある特定の入力に, ある特定の出力が対応し, その対応関係をもたらしめているのがその機能となっている。

例えば, この機械の機能が, 入力を二乗したものが出力となるようになっている時, この機械は二乗 TM と呼ばれる。我々に馴染みのある関数のことである。

しかし, TM においては, 入力と出力との間に不変の関係があると定義されるので, その範囲は関数に限定されない。機械とはいえ, 生物や人間に適用できないとされるわけでもない。

「ボールを蹴り上げたら (入力), ボールが上昇し, その後落下した (出力)」は, 万有引力 TM として TM の一つに数えられる。その他, 原因と結果, 刺激と反応なども, それぞれ自然法則 TM, 中枢神経系 TM と呼ばれるのである。

ある入力 (x) と出力 (y) との間に不変な関係 $f(x)$ があるので, TM には, 先ず三つの性質が認められる (Foerster [1984] p. 9)。

- (1) 予測可能
- (2) 履歴に依存しない

今、新たにある入力 (y) と出力 (z) との間に不変な関係 $g(y)$ があるとする
と、次の性質も認められる (Foerster [1984] p. 9)。

- (3) 合成可能

入力と出力との間に、不変の関係が認められるのであるから、計算の矢印を逆
向きに辿ることができ、性質(1)の裏側に、次に性質が認められる (Foerster
[1984] p. 9)。

- (4) 分析可能

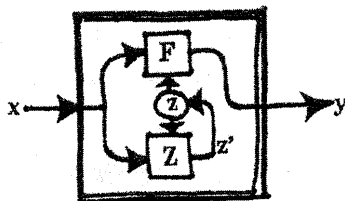
コインを入れれば、お目当てのジュースが出てくる。TM のように、世界
の出来事もまた生起するのであれば、小アレクサンドロスたちの思考の形式も
また、それに対応したものとして、是認もされよう。

ある入力において予想される出力が為されないとすると、機械には「不具
合」や「故障」があるということになる。ある出力において、分析の結果辿ら
れる入力が、それとは別の入力であったなら、その入力は「規格外」とも見な
されるだろう。

ところが世界は、世の出来事は、TM ではない——。ならば、世界や世の
出来事は NTM なのか。

NTM の一番の特徴は、入力と出力との間に不変の関係が認められない点に
ある。例えば、ある時に認められた入力と出力との関係が、別の時には認めら

第2図



出典：Foerster [1984] p. 11.

れないという事態である。

そこで、フェルスターは、【第2図】に示されたモデルによってNTMを概念化する。

この機械は、一見するとTMのように見える。ただ、機械の内部状態がTMのように一つ(TMにあっては、そもそも機械の「内部状態」という問題関心は存在しなかった)ではなく、機械の内部状態(z)が入力と出力との関係の決定に関与している。フェルスターは、内部状態にあるTMを埋め込んだのである(Foerster [1984] pp. 10-11)。

ただし、この内部状態の機械は、一つ前の内部状態が次の内部状態を生み出すという、再帰的な機械となっている。

フェルスターは、この機械を次のように、代数的に表現する。Fは駆動関数 driving function, Zは状態関数 state function と呼ばれる。

$$y = F(x, z)$$

$$z' = Z(x, z)$$

今ここで、入力と出力との対の連鎖を観察し、このNTMを同定しようとする。フェルスターは、その同定の作業が、いかに「困難」かを示すために、最小限の設定をして、それを示す。

二値の出力1個と二値の入力1~4個を持つ機械の内部状態をZ、駆動関数の数を N_d 、状態関数の数を N_s として、その結果は【第1表】のようになる

第1表

n	z	N_d	N_s
1	4	2^8	4^8
2	16	2^{64}	16^{64}
3	256	2^{2048}	256^{2048}
4	65536	$2^{1048576}$	$65536^{1048576}$

出典：Foerster [1984] p. 12.

注：表内の各数字は、原著版ではなく邦訳版の数字を用いた(邦訳, 17ページ)。

(Foerster [1984] p. 12)。

フェルスターの結論は、同定は不可能である、となる。計算の限界を超えているからだ。有限個のテスト結果から推測することが不可能な、駆動関数と状態関数を備えた機械が存在するということである。

面接試験が行われるとする。4人の受験者がいる。面接官は一人であって、その合否を決めるとする。その面接官が面接を始め、次の受験者がやって来ると、その状態が、前の受験者とのやりとりによって、状態が決定されるとする。そうすると、【第1表】からは、この「面接官機械」を同定するために調べなければならない機械の数は、 16^{64} あることになる。

したがって、NTM は次のような特質を有することになる (Foerster [1984] p. 12)。

- (1) 分析的に予測不可能
- (2) 履歴に依存する
- (3) 合成的決定可能
- (4) 分析的に決定不可能

世界の隅々まで、入力と出力のすべてのオペレーションを、己のものとしたはずのアレクサンドロス。ディオゲネスは、そのアレクサンドロスを無視し、その身体を移動させる。すべてのものを照らす中心として、影を作り出す太陽。ディオゲネスがアレクサンドロスを移動させるのは、自分こそがその太陽だと見なしているからである。夜から昼へ――。

III 日蝕——昼と夜の間に

世界は TM なのか。それとも NTM なのか。フェルスターの議論を見たあたりでは、世界は NTM なのだ、と思うだろう。先の面接試験の受験者も、自分が不合格であった時、受験の順番が違ったら、合否は変わっていたかもしれない。

TM として製造されたはずの機械も、故障する。そうすると、TM 化の専

門家に来て貰うことになる。事態は制御され、予測可能でなければ、身動き一つ取れなくなってしまう。

それがまた、ディオゲネスが賞賛されてきた理由でもある。完全無欠のものなどありはしない——。完全無欠を装うならば、「それは作為の結果である」。

最終判決を思わせるこうした物言い。ところがそうした物言いは、始まりの一步すら踏み出してはいない。ディオゲネスとは、ディオゲネスの仮面を被ったアレクサンドロスのことである。

TM がその実 NTM であり、その NTM を TM と見せかける作為を言いつのること。そして、作為の始点を見出し、その始点が無根拠であることを発見すること。そうしたとしても、それは入り口であって、出口ではない。もし入り口がそのまま出口でもあるのなら、入り口に立つだけで「作為の結果」は消えさせる³⁾。

西洋的な「知」は、ある危機を回避するために厳密にして堅固な建築をうちたてようとするが、逆にそれが何一つ基礎を持たないという危機を見出すことに終わる。だが、この症候的な「反復」を、だれが嘲笑することができようか（柄谷 [1981] 20ページ）。

この「反復」を嘲笑できるはずがない。入り口と出口は、重ならないのだから。ところが、柄谷のこの指摘は「80年代」の思考を特徴づけるきわめて重要な記念碑的指摘でありながら、前半部しか読まれなかったに違いない。作為の無根拠を指弾する議論ばかりが、支配的になってしまったからだ。

露呈した「知」の無根拠に対する反応は二種類あった。一つは、それぞれの対象が無根拠であることを暴き続けること。もう一つは、究極の根拠を見出すこと。「私」あるいは宇宙や自然の調和。あるいは、「西洋」に対する「日本」。だが同じ箇所柄谷は、さらにこう述べていた。

3) システムが合理的に把握されれば、システムが「自壊」すると言うのでは（大澤 [1992] 17ページ）、ナイヴに過ぎる。システムの根源を担うものが無根拠であると明らかになっても、それがシステムを存立させている根源にあるからだ。今度は別の無根拠なものによって代位され、システムは存続しうる。

ニーチェは「西洋人は仏教を理解するほどに成熟していない」という。たしかに、仏教は、本来的に「批判哲学」であって、アイデア・本質あるいは建築への意志そのものを「イデオロギー」として斥ける、いわば de-constructive な思考であったが、そこではあまりにも早く問題の決着がつけられてしまっている。また、ニーチェがというような仏教は、それ自体ひとつの社会的制度として存続してきた現実の仏教とはべつのものであって、いいかえれば、仏教は、西洋的な「建築への意志」のなかでのみ意義を回復するだけである（柄谷 [1981] 20ページ）。

無根拠を言うだけの反復や究極の根拠をそこに滑り込ませるのでは、それは早すぎた解決、安易な解決なのである。

安易な解決とは、「昼」を「夜」に逆転する「否定」である。「夜」は「昼」の対極に移動するだけで、「昼」の本質を維持し続け、そうした対立を生み出す「極性」を強化する。「夜」を支える「昼」の固有性と極性をもろともに無化するの「日蝕」であり、「否認」である⁴⁾。

「たえず『日蝕』のつづく世界」。阿部和重『アメリカの夜』の主人公、中山唯生は、安易な解決の不徹底さに対して、「おれが見本をみせてやろう」と言う。

これまでわれわれが批判してきた「春分の日」的なものとは、われわれ自身のことでもあった。しかしわれわれはそのことをすこしも恥じない。それは不可避的であるからだ。批判の射程がみずからにまておよんでいることを気づきながらもなお、われわれは攻撃をやめるわけにはいかなかった。いや、むしろわれわれはとうとう「自覚」へといたったのかもしれない。われわれには攻撃をつづけなければならない根拠がどこにもないからだ。ところが、現実には、にせの「特別」なもの、イメージの「特別」さが、

4) 否定 Verneigung と否認 Verleugnung との違いは、否定が否定されるべきものの「固有性」を維持したままの「逆転」であるとすれば、否認は否定の一時停止にある。否認は積極的忘却によってその「固有性」を廃棄する（柿本・嶋守 [1998] 186ページ）。「日蝕」については、（澤野 [1998] 7-14ページ）を見よ。

実はどこかにあるはずの真の特別なものをあらゆる場で陰へ追いやりとうしているようだ。われわれはその間にあるものへ注意ぶかく視線をおくり、あたかも「特別」なるものが「権勢」を保持しえていると錯覚している魂に、断固として抗わなければならない。私は、私自身を「切断」せねばならぬ必要がある（阿部 [1994] 184-185ページ）。

「建築への意志」に対して、1980年代の脱構築的諸潮流（カルチュラル・スタディーズ、フェミニズム、構築主義……）は、不徹底なのである。演じている役割を「これは役割であり、作為されたものであり、イデオロギーである」と、「本来の」自己が見ているのなら、役割は容易に取り替えるものとなる。

そして、舞台は容易にそのあり方を制御できることになる。意識の持ち方、主意主義によるNTMのTM化である。この主意主義は、中立的な「普遍」、特定の「個別」に汚されていない「普遍」の場から、中立的な「普遍」であると錯覚している「個別」を指弾する。

同じことが、「サイエンス・ウォーズ」でのアラン・ソーカルと彼に与する科学者たちにも言える。1980年代の脱構築的諸潮流への反発が、アラン・ソーカルを「ニセ論文」の投稿へと駆り立てた。中立的な「普遍」の場である科学に、それが中立的な「普遍」であると錯覚しているだけだと科学を否定する「個別」（＝脱構築的諸潮流）が介入し、科学を破壊した、という主張である。

一部の科学哲学者が、科学の法則についての正当性はなんら保証されていないから、自然科学といえども根拠のあるものではなく、人文社会科学と同じく文化的相対主義や認識的相対主義的な構築物にすぎぬと言わんばかりの論文を書いたりしているのは、まことに不適切なことである。こういった不満が一部の科学者のなかに鬱積し、一九九六年にA・ソーカルが多くの哲学者、科学哲学者をあざむくパロディ論文を書くという事件にまでなったのである（長尾 [2001] 36-37ページ）。

認識の相対論は「一部の科学哲学者」に特有なものなのだろうか。中立的な「普遍」、特定の「個別」に汚されていない「普遍」の場から、中立的な「普

遍」であると錯覚している「個別」を指弾する主意主義を、我々は克服したのであろうか⁵⁾。ソーカルたちがアレクサンドロスの側だとすれば、脱構築的諸潮流はディオゲネスの側となる。

IV トリヴィアへの生贄

リルケの言う「問いを愛する」には、緩やかな時間の流れがある。緩やかな時間とはいえ、絶え間なくスラスラと流れる時間ではない。苦悩や焦燥、「そうだったのか」と、堰を切ったように気持ちが沸き立つ時もあるだろう。

その渦巻きに溢れる流れに耐えきれず、人は粗雑な因果論や「完全無欠ではないこと」を否定的にしか捉えることのできない相対論に身を屈するのである。

リルケの『若き詩人への手紙』からさらに遡ること100年。ケーニヒスベルクで、ハインリッヒ・フォン・クライストは「喋りながら思考を練り上げていくことについて」という論攷を仕上げている。

その一節で、クライストは、ラ・フォンテーヌの『寓話』から、「ベストに罹った動物たち」の話を引きしている。クライストによれば、こうである (Kleist [1905-1906] S. 321-322)。

動物の王国にベストが蔓延した。ライオンは王国の主だった者を召集し、天の怒り——その現象態がベストの猖獗ということだが——を鎮めるには、生贄を捧げなければならないと述べる。ライオンは、こう言う。「国民のなかに、沢山の罪人 Sünder がいる。一番罪の大きい者が死ねば、他の者は破滅から救

5) エルンスト・マッハは、古典力学が歴史的産物であって、直接的知覚こそ歴史に対して中立的で信頼できる基体であると主張していた。「サイエンス・ウォーズ」において、脱構築的諸潮流をやり込めてきたソーカルとブリクモンが批判する「相対主義」とは、むしろマッハのこうしたスタンスに近いはずである。ソーカルとブリクモンは、科学哲学における相対主義を、「クワイナー・デュエム・テーゼ」と呼んでいる (Sokal, Bricmont [1997] pp. 52-53, p. 66, p. 69)。そのさい、theory-ladenness of observation と l'observation dépend de la théorie とが、同義とされている。「観察に理論が負荷される」と「観察が理論に依存する」とは、別の事態である。前者では、観察と理論は別々の二つの層に分離可能だが、後者では分離できない。マッハは、彼の批判する「中立的観察」への復帰を唱えているのである。ソーカルとブリクモンが求める、理論に汚染されていない、「中立的」観察である。議論は、見事に一巡してしまう。

われるに違いない。だから、自分にお前たちの非行 *Vergehungen* を正直に告白して欲しい」と。

ライオンは告白する。ひもじさに負けて、羊を殺したこと。出過ぎた真似をした犬を殺したこと。羊番があまりに美味しそうだったので、貪り食べてしまったこと。「誰もこれらよりも大きな欠陥の罪を犯していないなら *Wenn niemand sich größer Schwachheiten schuldig gemacht have*, 自分が死ぬ用意ができています」と。

不穏な空気をはね除けようとキツネが口を開く。羊や犬を殺して、何のことがあります。「賤しき *nichtswürdig* 畜生ですぞ」。羊番について話そうとしたが、キツネは考えの纏まらぬうちに、「それだけの酷いことをしたのですから」と口走ってしまう。「それは」と言いかけて、考える時間が生まれ、「羊番とはこういう類の者です」と繋ぐことができた。これで、話が一段落つき、キツネは胸をなで下ろす——。羊番とは、羊の「番」をする者。「動物を支配する権力を握っていると思いがっていたのです」と、ライオンを擁護することに成功する。

まだ、生贄が決まっていない。キツネはロバこそ「一番目的に適った *zweckmäßigst* 生贄」だと言い立てる。ロバこそは、ありとあらゆる草を平らげる、血に飢えた *blutdürstig* ものであると理由づけて。そのとき、全員がロバに襲いかかって、ずたずたにしてしまう。

ここには、二つの相異なる「罪」が登場する。「天」との関係における罪 *Sünde* と「地」における、法的な諸々の罪 *Vergehungen* である。ラ・ファンテーヌによる *péché* と *crime* の区別は、ここでも維持されている。

ところで、ライオンの語りは、最初に提示された天に対する罪から地における罪、法的な罪へと横滑りしているのは、すぐに見て取れる。最初の、天に対する罪だからこそ、告白とその罪への懺悔が導かれるのだが、そこで告白が要求するのは、己の地における罪とその「軽重」なのである。

その意味で、ライオンの告白は巧妙である。天と地の両方を含み持つ罪

Schuld によって、「良心」に基づいて、心から懺悔したのだから、無罪放免。だが、自分のあとに告白する者は、地での諸々の罪 Vergehungen を告白しなければならなくなる。

今や天の位置から、地にある者に影をもたらずライオンを、地の側から全面的に肯定するしか、天の怒りはおさまらないという次第となる。キツネが、ライオンの罪を因果論によって肯定するのは、そのためである。加えて、ライオンの餌食となったものは、どれもこれも因果応報、常に最上級の無価値なものゆえ、ライオンの仕業は、みな理に適ったものされてしまうのである。

ライオンと自分とを除いてキツネが辺りを見渡した時、最初に目に入ったのがロバだったのかもしれない。キツネは「最適解」を発見する。しかし、ロバは「血に飢えて」いたのか。ロバが食べるのは、草ばかりなのに……。

ベストの猖獗が暴力の蔓延を意味するのなら、ロバが血祭りに上げられ、天への生贄とされて、ひとまずベストの猖獗と暴力の蔓延は食い止められるだろう。では、これで最後か？ また、最上級の、生贄に最も相応しい、価値なきものとされた他の動物が血祭りに上げられる。

地での罪によって翻訳される天への罪の贖いは、暴力によって支えられているのである。その贖いにあっては、完全なる因果の連鎖、因果の網の目によって事態は覆い尽くされる。事態の起源が明示され、事態を解消するには、起源への遡及が要求される。その度に、起源への贖い、生贄の殺戮が実行される。またしても、NTM の TM 化——。

TM 化に生贄の殺戮がつきまとうのは、なぜか。次のエピソードを、是非知っておくべきであろう。

トロイアへと戦争に赴くギリシア軍を率いるアガメムノンは、進退窮まっていた。アウリスに集結したが、一向に風が吹かない。このままでは、トロイアに到着する前に、ギリシア軍の内部で戦争が始まってしまう。

予言者カルカスの話では、森に狩りに出かけた時、アガメムノンが狩猟の神であるアルテミスよりも、自分の方が上手だと言い放ったから、アルテミスが

怒って、アガ멤ノンの行く手を遮っているらしい。アルテミスは、その償いにアガ멤ノンの娘イピゲネイアを差し出せと。

アルテミス *Αρτεμις* は、ローマではディアナ *Diana* と同一視され、それはトリヴィア *Trivia* とも呼ばれた。それらはすべて、三叉路の処女神の名である。イピゲネイアは、アルテミスの神殿で、父によって喉を掻きぎられる。「これは、通常の、陳腐な *triviale*、伝統的な解決法であって、あらゆる宗教や、あらゆる政治の用いるところである」(Serres [1977] p. 146)。

では、科学はどのようなのであろうか。因果の解明を旨とする科学。「～であったので、…であった」。「～であった」と「～ではなかった」は併存しはするが、決して共立するわけではない。二つの項は、完全に排他的である。

TM 化によって世界を解明するという科学は、解明の作業の度に暴力を振るっていないだろうか。世界を TM として同定できないと、手をこまねいている NTM による科学もまた、TM による暴力の行使を容認していることになるのではなからうか。

では、局所であれば、こうはならないのか。局所であっても、TM (NTM でも同じだが) の網の目を辿る限り、対象はいつまでも対象として出現しない。網の目のなかでの関係を反復することで事を解決するのは、暴力の反復は決して終わりを迎えはしないのである (Serres [1977] p. 165)。

リルケの言う「問いを愛する」ためには、TM と NTM のもたらす関係の網の目から、離れなければならない。関係の網の目がいかに変動しようとも、不変な対象。諸主体の関係の編み目から抜け出た対象。

我々が「問いを愛する」ようになる時、TM と NTM の共謀による、生贄の殺戮は不可能となり、もはや誰も死なない世界が訪れるだろう。

* * *

本山美彦先生とお会いしてから、ちょうど20年になります。先生の『貿易論序説』(1982年、有斐閣)を拝読して、「全然僕には理解できないけれど、何か

すごいことが書いてる」と思い、先生のゼミの門を叩いたのも、つい昨日のことのように思い出されます。

その「はしがき」の冒頭には、「あらゆる解放は、人間の世界を、諸関係を、人間そのものへ復帰させることである」というマルクスの言葉が引かれています。今は、少しだけ分かったような気がします。なぜ最初に『貿易論序説』に心を引かれ、今もそうであるのか。

客体を諸主体の関係の編み目から抜け出させること——先生がお書きになっていた人間の「自由」とは、そういうことではなかったでしょうか。

文 献

* 外国語文献のうち、翻訳のあるものはできる限り使わせていただいたが、訳文を変更したことがある。その責任はすべて筆者にある。

阿部和重 [1994] 『アメリカの夜』講談社文庫、2001年。

Forster, H. v. [1984] “Principles of Self-Organization: In a Socio-Managerial Context” in *Self-organization and Management of Social Systems: Insights, Promises, Doubts and Questions*, eds. by H. Ulrich and G. J. B. Probst, Berlin, Heidelberg, Springer-Verlag, pp. 2-24. (徳安彰訳『自己組織化とマネジメント』東海大学出版会、1992年、2-32ページ)。

Foucault, M. [1966] “Une histoire restée muette,” in *Dits et écrits 1954-1988*, t. 1, édition établie sous la direction de D. Defert, F. Ewald, Paris, Gallimard, 1994, pp. 545-549.

柿本昭人・嶋守さやか [1998] 『社会の実存と存在——汝を傷つけた槍だけが汝の傷を癒す』世界思想社。

柄谷行人 [1981] 『隠喩としての建築』講談社学術文庫、1989年。

Kleist, H. v. [1805-1806] “Über die allmähliche Verfertigung der Denken beim Reden,” in *Sämtliche Werke und Briefe*, Bd. 2, H. Sembdner (Hg.), München, DTV, 2001, S. 319-324. (佐藤恵三訳「語りながら次第に思考を練り上げていくことについて」『クライスト全集 第一巻』沖積社、1998年、446-454ページ)。

長尾 真 [2001] 『「わかる」とは何か』岩波新書。

大澤真幸 [1992] 『行為の代数学 新版』青土社。

Rilke, R. M. [1907] *Auguste Rodin*, Frankfurt am Main, Leipzig, Insel, 1984. (星野慎一訳「オーギュスト・ロダン」『世界の文学36 リルケ』中央公論社、1964年、

423-458ページ)。

Rilke, R. M. [1929] *Briefe an einen jungen Dichter*, Frankfurt am Main, Leipzig, Insel. (生野幸吉訳「若き詩人への手紙」『世界の文学36 リルケ』中央公論社, 1964年, 351-421ページ)。

澤野雅樹 [1998] 『記憶と反復』青土社。

Serres, M. [1977] *La naissance de la physique dans le texte de Lucrèce*, Paris, Minuit. (豊田彰訳『ルクレティウスのテキストにおける物理学の誕生』法政大学出版局, 1996年)。

Sokal, A., Bricmont, J. [1997] *Impostures intellectuelles*, Paris, Odile Jacob.